

(様式2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（参加学生）

平成24年12月3日

所属：教育文化学部 国際言語文化課程 国際コミュニケーション選修 学年：2年次

氏名：山村 耀

研修先大学・機関名等（国）：ケニヤッタ大学・マトマイニチルドレンズホーム（ケニア）

在籍身分：研修生

渡航年月日：2012年9月1日

帰国年月日：2012年9月22日

○研修先での学習内容等

- ・孤児院での手伝い、子どもとのふれあい
- ・スラムの見学
- ・国立公園へ、野生動物の鑑賞
- ・JICA ケニア事務所の訪問
- ・ケニアで村おこしをしている日本人への訪問

○研修期間の生活面について

一週目：孤児院へ滞在し、週末は国立公園へ行き、その近くのキャンプに滞在。

二週目：ナニユキという都市へ行き、ホテルに滞在

三週目：ケニヤッタ大学のカンファレンスセンターに滞在

移動は主にタクシーを使った。

一週目の孤児院での滞在以外は、日本のビジネスホテルくらいの水準のホテルに滞在したため、あまり生活様式は日本と変らなかった。孤児院では、給湯施設はなかった。一応トイレは水洗だったが、壊れているところが多く、水バケツですくって流すところが多かった。

水道水は煮沸する必要がある、ミネラルウォーターを購入してそれを飲用にしていた。

○研修期間全般にわたる感想

ケニアには、着いて瞬間、空港での対応のされ方から日本との違いにかなり驚いた。空港の設備も日本より全然整っていないし、何より空港の人の態度が、日本と全く違った。空港を出たとき、ケニアの首都ナイロビは、私の想像よりはるかに発展していた。自動車だらけだし、高層ビルはたくさんある。首都に住む人々は、スーツを着て、車に乗って仕事に出かけるという、日本のサラリーマンとまるで同じような生活をしていて驚いた。

一週目に、マトマイニチルドレンズホームを訪ねた。ここでは、身寄りのない子どもや、様々な事情により、家族と一緒に住めなくなった子どもたちが保護されている。ここで、5日間滞在したのだが、ここでの生活が、一番ケニアの「庶民」の暮らしを体験できた。ホットシャワーはなく、食事ものすごく質素だし、洗濯は全部手洗いだし、水洗施設も日本のそれほど整

(様式2)

備されていないし、遊び道具などない。しかしそんな中でも、子どもたちは飽きることなく元気に遊んでいる。ここで日本の子どもとの差を感じた。日本では、物があふれていて、それがあるのが当たり前の生活を送っている。しかしそれがないと、大変な分、お互いに協力してやるから人と人とのコミュニケーションをせざるを得ない。また、日本ほど社会のシステムも発展していないため、事前に何かを決めておくという観念があまりない。このことも、その場その場のコミュニケーション力次第が必要になる原因である。これらのことから、日本でいるよりも、人間的なつながりを濃く感じる事ができたし、生活は質素だけれど、最終的にマトマイニでの子どもたちとの生活が、個人的に一番楽しかった。また、子供たちとのコミュニケーション手段は主に英語だったのだが、彼らは、自分の部族語と、スワヒリ語をも話すことができる。10歳にも満たない子供たちが、何言語も話すのを見てとても驚いた。多言語である状況が、彼らにとっては当たり前のことだった。これは日本語しか使わなくてもよい、日本とは大きく異なる点であった。

マトマイニ滞在中に、マザレスラムを訪ねた。想像通り、外観は汚い。上下水道はないから、小さな川の水を全てに使うため、非常に汚いし、スラム全体も臭い。しかし、「スラム」と聞いて最初は身構えていたのだが、そこに住んでいるのも、私たちと変わらない「人間」であるということ強く感じた。人々は、貧しいけれども、みな生き生きと暮らしていて、インフラは全く整備されていないけれど、それが直接的に人々の「幸せ」とつながっているわけではないのだと感じた。

一週目の週末に、マサイマラ国立公園へサファリに出かけた。それまで、主に日本語が通じる環境で過してきたため、初めて私たち学生だけでケニア人と接していかなければならないこととても不安であった。パッケージツアーの手続きの時に、私たちの認識と旅行会社のそれに違いがあり、英語を駆使して相手とコミュニケーションをとるのはとても苦労した。こういう面で自分の語学力が鍛えられるのだと思った。サファリ自体は、たくさんの野生動物が間近で見られて感動した。ホテルでの生活は、マトマイニとはかなり違って、観光者向けのため、日本でホテルに泊まるのと同じくらいのレベルだった。しかし、お湯が出るはずなのにできなかったり、蛇口が壊れていたり、ペットボトルの蓋がうまく開かなかったり、ところどころに、「ああ、ケニアだな。」と感じる部分があった。

二週目には、ナニユキという街で村落開発をしている水谷文美さんという日本人を訪ねた。小学校を訪ねる予定だったが、教師のストライキによって、授業は開始されていなかった。私はケニアで行われている英語教育にとっても興味があったため、個人的にはこれが一番残念なことだった。そのため、農業者が集まる、フィールドディで、日本についてのプレゼンテーションをする機会をもらった。プレゼンでは、日本人の、「改善主義」について紹介したが、ケニア人がわかってくれたかどうかは不安だった。この「改善主義」自体、水谷さんの受け売りで私たちがプレゼンしたようなものだったが、それでも人々の考え方を変えることはとても難しいと感じた。変えるのではなく、本人たちが気付いて自分で変わろうとする意志が必要なのだと強く思った。

(様式2)

三週目は、ケニヤッタ大学を訪ねた。そこでも教師はストライキのため、授業見学はできなかった。しかし、ジャパンフェアだけはやることになり、準備に追われていた。チラシを作り、キャンパス内の学生に配ったのだが、驚いたのが、ケニア人は、日本人のようにチラシを拒否する人が一人もいないことである。一人ひとりに紹介し、宣伝することができたため、当日のフェアでもたくさんの学生が来てくれた。フェア当日に、学生向けに日本の紹介のプレゼンをしたときに、思いもよらない質問がたくさん出て、日本人である私たちも、日本についてそんなによく知っているわけではないとわかり、もっとよく知らなくてはならないと実感した。

ケニアでは、全く未知のものにふれ、今までの自分を見つめ直すことが多くなり、物事をより広い視点から見ることができるようになったことが一番大きな収穫であると思う。

○今後の勉強計画

ケニアで自分の語学のレベルを知ることができた。現在、オーストラリアでの一年間の留学を予定しており、そのための語学力の向上が今のところの一番の目標である。また、ケニアの多言語環境の経験が、自分の卒業研究テーマの予定である第二言語習得にうまく結び付けられれば良いと思う。